

『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』（作品社）附録解説

神話を書き換え、高く翔べ

——ジェスミン・ウォードとアメリカの十年

青木耕平

*本稿は、ジェスミン・ウォード『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』（Jesmyn Ward, *Sing, Unburied, Sing*, 2017）を読み解く一助となるべく書かれた解説であり、物語内容に多少踏み込みはするが、その全容や結末を明かすことはしない。

❁ はじめに——ジェスミン・ウォードと二〇一〇年代

ジェスミン・ウォード『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』は、雑誌「タイム」そして「エンターテインメント・ウィークリー」それぞれが発表した「二〇一〇年代最高の小説十冊」の一冊に選ばれている。両誌は違う選定基準を有しており、それぞれ違う評が寄せられているのだが、ある一つの見解を完璧に共有していた——「ジェスミン・ウォード以上の充実度でこの十年間を駆け抜けた作家など、他にいない」

そう、二〇一〇年代のアメリカ文学は、ジェスミン・ウォードと本書を抜きにして語ることはできない。二〇一一年、当時三十四歳のウォードは第二長編『骨を引き上げろ』(Salvage the Bones)で全米図書賞を受賞した。全米図書賞はアメリカで最も歴史と権威ある賞だが、同時に大変保守的な文学賞でもあり、複数回受賞している八名の作家はソール・ペロウやジョン・アップダイクなど、全員が白人、かつ男性だった。その旧習を打破した作家こそジェスミン・ウォードであり、その作品こそ、『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』である。二〇一七年、アフリカン・アメリカンの女性であるウォードは本作で史上初めて女性の、加えて史上初の非白人の全米図書賞複数回受賞者となり、文字通りの意味においてアメリカ文学史を書き換えた。偶発的な出来事でも政治的な配慮でもなく、これが必然の栄冠であるということに、本書を一読した者は同意せざるを得ないだろう。プロットの面白さ、構成の見事さ、語りの巧みさ、現代を抉るジャーナリズムと現在へ突き刺さる歴史からの視座——そのすべてを併せ持つ本作は、小説としての強度が違う。

なによりもまず、読者を掴んで離さない物語がある。プロットの中心には不和を抱えた一つの家族と解き明かされない一つの謎があり、家族が再会し合流するとともにその謎が明らかになっていく。語りの技法の見事さが、面白さを倍増させる。十三歳の黒人少年ジョジョと、心が通い合わない彼の母親レオニ、そして中盤から加わる第三の語り手が、それぞれの視点から物語を紡ぎ、お互いの章が緊張感を孕みつつダイナミズムを生んで、複数の伏線がラストへと向かって加速しながら収束していく構成に、読者は舌を巻くだろう。これだけですべてに小説として傑作であるが、現代のアメリカ南部を舞台とする本作は、合衆国が現在抱えるさまざまな問題を炙り出す。人種差別、階級格差、貧困の蔓延、ドラッグと民営化された監獄、憎悪による暴力の連鎖、未だ根強いジェンダーや性に対する偏見等々が、まるでルポルタージュを読んでいるかのように、それでいて物語の必然として描き出される。現代アメリカの病理を写すこの小説の奥底に流れるのは、悲劇としてのアメリカ史である。建国の精神として憲法で自由と平等をその初めから明記しながら、アメリカはアフリカ大陸より黒人を強制輸送し、彼らの人権を剥奪し、尊厳を踏みにじり、自由を奪って奴隷として強制労働させることよって発展を遂げてきた。世界で最も豊かな国となりながら、いまなお人種差別が根強く存在するアメリカで、「葬られぬ者たち」は歌う。

このレベルの傑作は、偶然たまたま思いつきで書けるものではない。本作は、ウォードの作家としての十年間のキャリアの集大成であり、彼女のそれまでの四十年間の人生そのものの結晶にほかならない。まずは、『葬られぬ者たちよ』に至るまでのウォードのキャリアを時系列に沿って概観しよう。

❁ ミシシッピ州デ・ライル、弟の死、ハリケーン・カトリーナ

ジェスミン・ウオードは一九七七年、カリフォルニア州バークレーに生まれ、三歳のときにミシシッピ州デ・ライル (DeLisle) に移り住んだ。そこは、ウオード一族が数世紀にわたって生活を営む湾岸の街であった。デ・ライルは黒人コミュニティが多く存在するだけでなく、さまざまな出自を持つ低所得層たちが住むエリアであり、ウオードは最初に通った公立学校で同じ黒人の生徒たちからいじめにあう。ウオードの母親は裕福な白人家庭で働くメイドであり、彼女の雇い主が学費を払う形でウオードは私立学校へと転入するが、今度はそこで白人生徒たちからもいじめられてしまう。家族からの愛やコミュニティの連帯といった美しいものだけでなく、貧困やドラッグ等の社会的な問題を、そして身を以て人種差別を、デ・ライルで彼女は経験した。

そのような境遇であったにもかかわらず、ウオードは一族で初めて大学に進学することとなった。西海岸カリフォルニアに位置するアメリカ屈指の名門校スタンフォード大学で英文学の学位を取り、同大学院に進学すると、二〇〇〇年十月にメディア・コミュニケーション学で修士号を取得する。高い学歴を持つにもかかわらず就職が決まらないウオードは、デ・ライルに戻り家族と過ごす。彼女が仕事の面接でニューヨークにいる間に、悲劇は起こった。白人男性ドライバーの乗るトラックに衝突され、乗っていた車が大破し、弟ジョシユアが亡くなったのだ。飲酒や危険な運転であったことを示す状況証拠があったにもかかわらず、翌日酔いのさめた状態で出頭したその白人男性は、警察と司法からわずか三年二カ月の実刑を与えられ、遺族に一切の保証金を支払うことはなかった。ジョシユア

は享年わずか十九だった。ウオードは言う、「弟の死によつて、私は、自分たちについての物語を語りたい、という強い欲望を抱いた」。小説家ウオードの誕生には弟ジョシユアの死が深く関わり、のちに彼女が描く小説すべてに弟の死は描かれることとなる。

二〇〇五年、ミシガン大学の創作文芸科を修了し、作家としてのキャリアを始めるべくデ・ライルに戻ったウオードを待ち受けていたものは、アメリカ史上最悪の天災、ハリケーン・カトリーナであった。ウオード一家の家は流され、地域の教会に避難すべく急いだが、多くの車が打ち捨てられ座礁し、たどり着くことができなかった。一家は白人地主のもとに避難しようとしたが、地主はウオードらの持ち物を検分した挙げ句、「あまりに混み合っているから」という理由でウオード一家の保護を拒否した。ハリケーン・カトリーナという人智を超えた巨大な天災、たどり着けなかった聖なる場所、非常時にこそ表出する人種差別と人間の愚かさ——これら一連の体験がウオードの心を深く傷つけ、生活的にも精神的にもしばらく小説を書くことができなくなってしまう。

❁ 「粗野な森」サーガの誕生

殺されてしまった弟、流されてしまった家、自分の育った故郷はもう二度と元通りになることはない——。この喪失の経験が、創造へと転化する。

ハリケーン・カトリーナが過ぎ去ったあと、私は、自分の育った街がもうどこにも存在しないと
いうことに気づいた。私の小説はすべてカトリーナ以降に書かれたものである。ある意味で、私

は自分が失った故郷を書き直そうとしているのかもしれない。小説のページの中であったとしても、あの街を生き返らせたいと願っているのかもしれない。

(エドウィージ・ダンティカとの対話、二〇一五年)

このようにして、ウオードはデ・ライルを基として、小説世界に架空の街“Bois Sauvage”を創り上げた。“Bois Sauvage”はフランス語で、英語に直せば“Savage Woods”である。日本語ならば「粗野な森」¹、²でも訳されるのだろうか。デビュー作『線が血を流すところ』(Where the Line Bleeds)³、第二作『骨を引き上げろ』⁴、そして本作『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』に至るまで、ウオードの全小説はすべてこの「粗野な森」を舞台としている。

ミシシッピを舞台とする架空の街で一連のサーガを綴った偉大なる先人として、ウイリアム・フォークナーがいる。ウオードにとってフォークナーは文学的英雄の一人であり、彼女は数々のインタビュでフォークナーからの影響を公言し、本作『葬られぬ者たちよ』の直接的な先行作品としてフォークナーの『死の床に横たわりて』(As I Lay Dying)があることを認めている。フォークナーは白人男性の立場から、背負うべき負の遺産としての人種問題をヨクナパトーフア・サーガで描いたが、ウオードはそこに生きる黒人女性としてフォークナーの文学的遺産を引き継ぎ、二十一世紀の新たなサーガを創生した。

二〇〇五年、ハリケーン・カトリーナがミシシッピを襲った当時の大統領ジョージ・W・ブッシュは、被災後の対応が人種差別的、とりわけ黒人差別的であると大きな非難を浴びた。カトリーナが暴いたのは人種差別だけではない。ナオミ・クラインは『ショック・ドクトリン』のなかで、カトリーナ以前にそこにあつた黒人や低所得階級のコミュニティが街の再建を口実として一掃され、そこに巨大資本が流入して、結果的にそれまでのコミュニティが排除されるさまを「惨事便乗型資本主義」と呼んで厳しく批判した。自然災害、人種差別、資本主義の蹂躪——カトリーナ以降のデ・ライルは粗野な森を舞台に、現代アメリカに蔓延る暴力が、ウオードの作品世界に記述されていく。

✿ 人種問題のないアメリカ ↓ 人種問題が激化するアメリカ

二〇〇八年、大統領選挙におけるバラク・オバマの勝利によって、史上初の黒人大統領が誕生することが確定し、アメリカ全土が歓喜に湧いた。そのときに使われた言葉に、「ポスト・レイシャル・アメリカ (Post-Racial-America)」⁵というものがある。オバマ大統領誕生をもって、アメリカの人種問題は過去のものとなった、という意味だ。チェンジ、という選挙キャンペーンのスローガンそのままに、アメリカはこれからチェンジする、いやもうすでにチェンジしたのだ、という楽観論である。

この二〇〇八年に、カトリーナの惨事から立ち直ったウオードは、デビュー作『線が血を流すところ』を発表する。「粗野な森」を舞台に、一人は立派な就職先を見つけるも、もう一人は就職先が見つからず違法薬物の売人になるしか生きる術がない、対照的な人生を歩むことになるアフリカン・アメリカンの双子の兄弟の物語だ。彼らの母親は幼いときに育児を放棄し、父親も無職で家に寄りつかず、双子は祖母に育てられたが、その祖母は病床に臥せている。物語における家族の設定は、『葬られぬ者たちよ』と多くのものを共有している。作品ごとにテーマや作風をガラリと変える多彩な小説家とは対照的に、ウオードは一つのテーマを深化させていく作家である。

『線が血を流すところ』のテーマを引き継ぎながら、ハリケーン・カトリーナに翻弄される数日間を正面から描いた第二長編『骨を引き上げろ』で、ウォードは一度目の全米図書賞を手にする。小説の主人公である語り手は、ティーンエイジャーの黒人の女の子エシュである。エシュには兄が二人と弟が一人いる。母は弟を産んですぐ亡くなり、父親はアルコール中毒で、一家の暮らしは極貧そのものである。エシュは十二歳から性的な経験を持ち、物語序盤で兄の友人と性交渉を持った挙げ句に望まない妊娠をしてしまう。ウォードはこの作品で神話の要素を意識的に取り入れた。エシュのモデルとなっているのは、ギリシャ神話『王女メディア』のメディアである。夫に裏切られ、社会から追放され、その恨みを復讐によって果たすメディアは、男性中心主義社会における女性の苦難を描いたフェミニズム的な神話である。このようなモチーフを用いた理由を、ウォードはこう説明している。

私が激しい怒りを覚えるのは、白人男性作家の書いた小説だけが普遍的な価値があると見なされて古典と比較され、黒人や女性の作家の作品は常にゲットー化されて、他者のものとされることだ。私はエシュとギリシャ悲劇のアンチ・ヒーローであるメディアを併置し、西洋古典文学の中に自分の小説を位置づけたかった。たしかに私の書くものは、私の属するコミュニティ、私の知る黒人たち、地域の荒廃などに固有の経験であるけれど、それ以上に、生き残った人々や、野生なるものを含んだより広い物語であって、本質的には普遍的な、人間の物語だ。

（『パリ・レビュー』二〇一一年八月号）

ウォードはこのようにして、既存の保守的な権威に、黒人作家として、女性作家として、ハリケーン・カトリーナに蹂躪されたミシシッピの作家として挑み、見事にそれを打ち倒していく。受賞後に行なわれたインタビュでウォードはこう述べている。

ポスト・レイシャル・アメリカという言葉の人々が口にするのを聞くのが辛い。私は、人種問題のないアメリカ、そんな場所を見たことがない。いつか、そのような語を口にする人たちが、私の小説を読んでくれることを望んでいる。（BBCテレビでのインタビュ、二〇一一年）

はたしてウォードが言うように、「人種問題のないアメリカ」なる語が幻想に過ぎないことをアメリカはすぐに知ることとなる。それどころか、正反対の言葉を口にする者さえ出始めた——「アメリカの人種問題は過去最悪だ」

❁ ブラック・ライヴズ・マター、『私たちが刈り取った男たち』、『今が火だ』

第一期オバマ政権の最後の年、二〇一二年二月、フロリダで当時十七歳だったアフリカン・アメリカンの少年トレイボン・マーティンが自警団に射殺され、射撃犯が無罪で釈放されるという事件が起こった。全米各地で抗議運動が起こり、翌二〇一三年には「ブラック・ライヴズ・マター（黒人の生命は大切だ）」というスローガンを掲げるムーブメントが巻き起こった。

ブラック・ライヴズ・マターと奇しくも同じ二〇一三年、ウォードは回想録『私たちが刈り取った男たち』(Men We Reaped)を発表する。二〇〇〇年から二〇〇四年のわずか四年あまりの期間のデ・

ライルで、自殺、殺人、事故などの理由で、ウオードは親族や親しい友人を五人も失う。メモワールでありながら自伝のようでもあるこの本をウオードのベストに推す批評家もいるほどに、美しい散文と構成を持ったノンフィクションである。最も悲しく、最も辛く、最も胸を打つのはやはり、最終章に配置された、弟ジョシユアの章だ。のちのインタビューで、ウオードはこう答えている——「ときどき弟に対する罪悪感に苛まれることがある。彼は二十歳にもなれなかったのに、私は今もこうして生きている」

ジョシユアのように、惨たらしく命を奪われた黒人ティーンエイジャーが、アメリカを大きく動かしていく。二〇一四年、ミズーリ州において無防備の十八歳の黒人少年が白人警察官に射殺された。のちにファーガソン事件と呼ばれるこの射殺事件によってブラック・ライヴズ・マター運動が全米に波及するに伴い、人種差別それ自体も激化、オバマ政権二期下で人種対立の緊張は最悪のものとなる。ウオードはこのような人種問題に対して一石を投じるべく、『今が火だ——新世代が人種を語る』(The Fire This Time: A New Generation Speaks about Race)という、詩や散文、そしてエッセイが収められた書籍を自ら編纂して二〇一六年に出版した。『今が火だ』のタイトルは、偉大な作家であり活動家であったジェイムズ・ボールドウインの『次は火だ』(The Fire Next Time, 1963)を意識して名づけられている。ボールドウインのこの書籍タイトルは、旧約聖書『創世記』において神が洪水で世界を滅ぼした際、方舟をつくったノアに「もう水で世界を滅ぼすことはない。次に世界を滅ぼすときは火をもって行なう」として虹を見た神の約束が由来である。半世紀前に公民権運動で揺れるアメリカにおいて、作家として、小説家として、黒人の知識人として声をあげ行動を起こしたボールドウイン。彼に倣い、ウオードもまた傍観者であることを選ばず、作家として声をあげることを選んだ。

ただ、ハリケーン・カトリーナによつて家が水に流されたウオードにとり、この『今が火だ』というタイトルは何重もの意味を持っている。水、そして洪水は『葬られぬ者たちよ』においても、重要なメタファーを負わされている。

以上、駆け足でジェスミン・ウオードのキャリアを概観してきたが、彼女が著してきた二冊の長編小説と二冊のノンフィクションのエッセンスのすべてが本書『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』には詰まっている。テーマは深化し、語りの技術は向上し、構成は唸りたくなるほど見事だ。本書は、紛れもなくウオードの最高傑作である。

以下、小説の内容に(過度のネタバレを避けつつ)少しばかり踏み込むことをご容赦願いたい。

❖ 第一の語り手ジョジョと、パーチマン刑務所

本書は三名の語り手を持つ全十五章構成で、各章はそれぞれその章の語り手の一人称視点から綴られる。第一の語り手であり、本作の第一主人公は、十三歳になったばかりの少年ジョジョだ。まだ幼い妹ケイラもいるというのに、母親レオニは育児を祖父と祖母にまかせきりで、父マイケルはケイラを妊娠したタイミングでパーチマンに投獄され不在である。ジョジョとケイラの兄妹を育てるのは祖母だが、祖母は病の床に臥せている。ジョジョは祖父リヴァアを祖父というよりも父親のように慕い、息子を失った過去を持つリヴァアもジョジョを孫ではなく息子のように育てている。ここまでが、第一章で示される家族の状況だ。

『葬られぬ者たち』もまた前二作同様「粗野な森」で展開される物語なのだが、本作で鍵を握る土地は「パーチマン」と呼ばれる刑務所だ。パーチマンは実在しており、その正式名称を「ミシシッピ州刑務所」といい、「パーチマン農場」の名で広く知られている。一九〇一年に建てられたパーチマンは囚人を農場労働で酷使することで悪名が高く、「パーチマン農場ブルース」という歌が有名である。小説作品で言えば『館』を初めとするフォークナーの作品にも何度か登場するし、ジョン・グリシャム『処刑室』の舞台でもある。映画でいえば、大恐慌期一九三〇年代のパーチマンを舞台に、ジョージ・クルーニーら詐欺で投獄された白人三名の囚人が脱獄するさまをオフビートに描いたコーエン兄弟監督作品の『オー・ブラザー！』が記憶に新しい。

父マイケルがパーチマンに投獄されているだけでなく、祖父リヴァーも一九四〇年代にパーチマンに投獄され、そこで過酷な労働に従事させられていた過去を持つ。祖父がパーチマンのことをジョージヨに語る時、必ずリッチーという名の黒人少年が登場するのだが、祖父の話は決して最後までたどり着かず、リッチーがどうなったかが明かされない。このようにして、ジョージヨの一人称語りのなかに祖父の回想が挿入される。祖父の語るパーチマンでのリッチーとの物語は、『オー・ブラザー！』のようなオフビートな語りには、決してなりえない。

❖ 第二の語り手レオニと、第一の霊ギヴン

第二の語り手は、ジョージヨの母親レオニである。レオニは、歳の近い兄ギヴンを過去に亡くしている。ギヴンはアメリカン・フットボールの高校生スタープレイヤーで、白人のチームメイトからも信

頼が厚く、大学進学も決まっていたが、それを羨んでいた白人に背後から撃ち殺される。相談を受けた白人の元保安官は射殺犯の親戚であり、悪意なきアクシデントであったと断言して、犯人は放免される。このギヴンの設定に、著者ウオードの弟ジョシユアの死と、ファーガソン事件を初めとした黒人射殺事件が色濃い影を落としていることは間違いない。

ギヴンを殺した白人の親戚であり、事故と言い張った元保安官の息子が、ジョージヨとケイラの父親であり、レオニの夫であるマイケルだ。兄を亡くしたレオニに謝罪しようとマイケルは近づき、二人は恋人関係となって、ジョージヨを身籠もったのだった。本作は『骨を引き上げる』以降の作品として、カトリーナによる災禍がさらに経済格差を拡大したことも描かれている。ミシシッピにおける経済状況の悪化は白人低所得層にも及ぶのだが、それはつまり仕事をなくした白人たちが黒人の仕事に押し寄せることを意味し、結果として最も煽りを食らうのは黒人のワーキングクラス、それもレオニのような女性である。黒人の兄を失い、白人の男を愛し、混血となった自らの息子と娘を愛しきれずに、仕事もうまくいかないレオニが逃げ込む先にあるのがドラッグだ。ドラッグをキメてハイになるときだけ、彼女は現実から解放されるが、同時にそのときだけ、死んだ兄ギヴンのゴーストがレオニの前に現れる。

ジョージヨとケイラ（レオニはミケイラと呼ぶ）の親密な兄妹の結びつきが、失われた自身の兄妹関係を思い起こさせ、レオニは我が子たちから目を背ける。第一の語り手である息子ジョージヨから見れば、レオニは養育を放棄する最低の母親であるが、レオニ本人からすれば、彼女もまた、現代アメリカ南部に根強く巣食う男性中心主義と人種差別、そしてカトリーナ以降に加速し続ける資本主義の被害者である。

物語序盤、ジョジョの父でありレオニの夫であるマイケルから、パーチマンを出所するという連絡が入る。マイケルを迎えに親子揃ってパーチマンに向かう旅が、前半部のプロットの核となる。

❁ 第三の語り手、葬られぬ者（たち）

中盤、ギヴンではないもう一人のゴースト、「葬られぬ者たち」の一人が登場し、第三の語り手となるのだが、それは本書最大の肝であるため、直接的な言及は控えたい。その代わりにここでは、この設定の重要な先行作品を一つ紹介しよう。

本書は発売されるとすぐさま大きな反響を呼び、絶賛する書評が数多く英語圏各誌に掲載された。すでに述べたように、フォークナーの『死の床に横たわりて』が重要な先行作品としてあるのだが、それ以上に比較項として最も多く名があがった作品は、アフリカン・アメリカン初のノーベル賞作家トニ・モリスンの代表作『ビラヴド』だった。

『ビラヴド』の舞台は、奴隷制の傷跡が深く残る南北戦争後のアメリカ南部。物語の中心人物である元奴隷の女性は、二歳にも満たない自分の娘を、自分の手で殺した。憎しみから殺したのではない、白人の逃亡スレイヴ・ハンターが迫る極限状態の中、幼き娘が奴隷とされ虐待され^{なぶ}罵られ苦しむことがないように、愛ゆえに喉を切ったのである。母親は、娘を心から愛していた。ゆえに、その娘の墓に、「ビラヴド（愛しい子）」と彫った。そして十八年後、解放されて自由に未婚と暮らす彼女の前に、「ビラヴド」と名乗る二十歳の女性が現れる。母はかつて自分が殺した娘のゴーストであるとビラヴドの正体を見抜き、娘もそれが死んだ姉であると理解しつつ、母と娘とビラヴドは共同生活を営んでいく

——以上が『ビラヴド』の基本設定であり、第三の語り手の登場によつて『葬られぬ者たち』は『ビラヴド』に接近していく。ウォード自身が、本作における『ビラヴド』の影響について語っている。

子供のゴーストを書こうとしたとき、真つ先にトニ・モリスンの『ビラヴド』が心に浮かんだ。

『ビラヴド』に登場する子供のゴーストは、文学史上最もバワフルで、最もインタラステイキングで、最も複雑なゴーストの一つだ。（PBSニュースのインタビュー、二〇一八年）

ビラヴド以降のアメリカ文学で最も印象深い子供のゴーストこそが、ジョジョ、レオニに次ぐ本書第三の語り手であり、この設定により、物語に歴史の重み加わる。また、もう一つ本作の重要な先行作品として、トニ・モリスン『ソロモンの歌』があることも指摘しておく。それは、葬られぬ白骨死体の謎をめぐる物語であり、兄と妹の確執の物語であり、「歌え、歌え」という叫ぶ父親の物語でもあるからだ。

『歌え、葬られぬ者たちよ、歌え』は、ウォードからモリスンへの世紀をまたいだ応答でもある。トニ・モリスンが二〇一九年に亡くなったとき、多くのメディアがウォードにコメントを求めたのは、必然だった。

❁ 歌え、葬られぬ者たちよ、歌え

ジェスミン・ウォードは、失われた親族、元通りにならない故郷を「粗野な森」サーガで描いてき

たが、それは決して「歴史修正主義」の想像力ではない。「弟は白人に轢き殺された、ハリケーン・カトリーナが街を流した、人種差別や性差別をする男性が大統領に就任した、それでも前を向いて歌え」——アメリカや日本だけでなく、修正主義のノスタルジアに溢れた作品が跋扈する**（ばうこ）**。昨今において、本作の孤高さは際立っている。ウオードは過去を直視し、現代を睨みつけ、まっすぐに未来を見据えつつ、今まで書かれてきた男性中心主義的な神話を、白人中心主義の文学を、奴隷制という負の歴史を、今起こっている経済搾取を、希望を捨てずに未来を描くためにこそ書き換えようとしている。

読者から「タイトルである、葬られぬ者たちとは、一体誰のことなのか？」と問われたウオードは、「葬られぬ者たち、とは無残な死に方をしたゴーストだけを指すわけではない。そこには生者も含まれている」と答えた。本書は、過去の黒人奴隷制の歴史を描いた小説であり、現代アメリカにおける暴力の犠牲者たちに対する鎮魂歌でもあり、今まさに苦難の中を生きる人間に対して、歌うのだ、と未来に背中を押す作品でもある。本作を含め、ウオードの作品には「飛翔」するイメージが頻出する。すべてのものが高く飛べるわけではない。しかしウオードは、彼ら彼女たちがいつか飛ぶことを、切に願ってそれを書いている。

二〇一一年三月十一日に巨大な津波によって被害を受けたここ日本でこそ、ジェスミン・ウオードは広く読まれるべきだ。まずは本書の翻訳出版を祝いつつ、カトリーナを描いた『骨を引き上げろ』の翻訳が出ることを願ってやまない。